東邦学誌
第39巻第１号
2010年６月
論　文

絵本から聞こえる音楽

古　市　久　子

目　　次

Ⅰ　動機と目的
Ⅱ　方法
Ⅲ　絵本は音楽をどのように表現しているか（結果）
　１．絵本が語る音楽の姿
　（1）音楽の描かれ方の概略（大項目）
　（2）絵本の中で多く見られた音楽の場面（小項目）
　（3）音楽の描かれ方の違い（国別・年代別）
　２．音楽の描かれ方の具体例
Ⅳ　絵本の中の音楽のイメージ
　１．普遍的な音楽のもつ力
　（1）音楽が人生の役に立つ
　（2）音楽の上手下手がもたらすこと
　（3）文化・環境としての音楽
　２．イメージを音で表す
　３．やかましい音 ・嫌な音
Ⅴ　絵本から聞こえる音楽

Ⅰ　動機と目的

本論文は、絵本に描かれた音楽が子どもたちに伝えるメッセージはどのようであるのかを見つつ、絵本からなぜ音楽がきこえるのかについても考えるための研究である。筆者の専門は身体表現であるが、研究テーマである「子どもの身体表現の発達」において、絵本が少なからず影響を及ぼす次の３点から、このテーマを設定した。①音・音楽の影響は身体表現において動きを引き出す大きな刺激となっていること、②身体表現の刺激として絵本から着想したものが多く使われていること、③子どもたちの心に絵本は無理なく浸透し、しかも、毎日のように目に触れること、などである。音楽を扱った絵本は、音を感じることと同時に、無意識に学ぶことが多い。絵本から音楽を感じるということは、身体のどこかが、それを誘引していることが考えられる。子どもは、すでに、生後１年の歩く前に、音楽に合わせて身体を動かすことは手や脚、身体のあちこちで観察されている。実際の音楽はこのように生後の子どもたちに朝から晩まで刺激として与えられ、子どもに何らかの感情を起こさせる。年齢が大きくなるにつれて音・音楽はさらに子どもの周囲にあふれるようになる。しかし、それは近くにある周囲の音に限られるが、絵本は遠い地方の音や、自分の周囲にはない音の存在も教えてくれる。また、絵本に取り上げられたその音に集中して楽しむことができる。

河合・松居・柳田の講演や討議集である『絵本の力』には「絵本の中の音と歌」の項があり、「絵本の中にいかに「音」が大切な要素として描かれているか」について語られている。絵本からは「いろいろと音が聞こえてくる。そして、また、一方では、音楽というものがあって、音楽が主体になっている絵本ももちろんある。この場合、絵本の中の音は、音楽として語られるので、わかりやすいと言えばわかりやすい。

しかし、そもそも音楽とは何だろう［1］」と疑問を投げかけている。また、「絵本を見ていると音がいっぱい聞こえてくる。そういう可能性をもっている［2］」とも講演している。筆者もこのことを強く感じていて、この一文に心を動かされたことが論文の出発点になった。さらに、音楽という連続した時間の流れを一枚の紙の上で、平面的に表すことのできる不思議さも考えてみたかった。

河合の講演にも出てくる『だくちる』の絵本の中にはイグアノドンがはじめて聞くプテルダクテルのダクチルダクチルという音に、「うれしくてうれしくてどんどんうれしくて（24頁）もう　どんどん　ばんばん　うれしかった（27頁）［3］」、というテキストがあるが、この絵本を読んだとき、筆者の耳に確かにうれしい音が響いた。『だくちる』を取り上げて解説している絵本論は何冊かあり、誰もいないところではじめて聞く声について、二人の子どものやり取りの面白さを書いたもの［4］などがある。河合は、さらに、『アフリカの音』をあげている。「かわいた風にのり、タイコのことばがはこばれていく(２頁)　ヤギは死んで皮をのこし　音になってまた生きる（５頁）かわいた風にのりタイコのことばがはこばれていく（８頁）タイコたたき　タイコたたく　みんなおどり　みんなおどる（24頁）［5］」という文章はそのまま、最後に「音と歌というのは、心をすましていたら聞こえてくる魂の響きといっていいのではないか［6］」と結んでいることばにつながる。

心に響くことを考えるとき、子どもだけではなく、柳田は『大人が涙する時』で「心のゆりかご・ヴァイオリンの音色」の項で、「年齢や民族や宗教の違いを超えて「心に響くもの」となると、一番普遍性があるのは、やはり、音楽ではないだろうか」という［7］。取り上げた絵本はガブリエル・バンサンの『ふたりはまちのおんがくか』で、くまとねずみの「ふたりが“街の音楽家”として成功できたのは、少女の声とヴァイオリンの音に、たとえ貧しくても絶望することなく、支えあって前向きに生きようとするふたりの心が浸み渡り響きあって、街をゆく人々の心に届いたからであろう［8］」と、お話の解説をしている。前段の河合の講演にもあったように、音楽は読み手の心が自主的に響かせるものなのである。中島も『ココ・マッカリーナのしみこむしみこむ　えほん』の中で『オーケストラの105人』『ドオン！』『バスにのって』『にぎやかな音楽バス』『ワニのオーケストラの入門』『おいしそうなバレエ』『ぽぱーぺぽぴぱっぷ』『おばけのコンサート』の８冊を紹介して、音楽が聞こえてくる絵本たちとしている［9］。本研究のテーマと同じ目標であるが、絵本の紹介のみである。

また、片岡は『感性と子育ての読書法　いま、子どもと本を楽しもう』で『ラヴ・ユー・フォー・エバー』をとりあげて、「赤ちゃんのときに歌ってもらった歌や、９歳のいたずら盛りのときにもこの歌を歌ってあげる。ティーン・エイジャーになって理解に苦しむ歌を歌っていた息子も自分の子どもにはこの歌を歌う［10］」という話であるが、片岡はこの絵本を高校生も感動した「感じる絵本」の項に上げている［11］。世代に受け継がれる愛が、歌を通して語られている絵本である。

さらに、小学校における授業に使う絵本について考えた“文教大学絵本と教育を考える会”の『絵本でひろがる楽しい授業』の中で『トンカチぼうや』を取り上げている。そこで「人間は目はものを見、耳は音をきき、鼻は匂いをかぎ、口はものを食べ、手はものを触るというように、役割分担を固定して決めて考えがちです。（中略）目で音を聞き、耳でものを見たなどということは、誰でも本当は経験しているはずです。そういった身体性を思い出し、共通のリズムや色、形を見つけることができれば、表現というものをもっと自由に考えられるようになるでしょう［12］」と教科という境目を越えた実践を提唱している。これは幼児教育に関して平成元年に公布された教育要領の領域『表現』に準ずる小学校版ともいうことができる。

中村は『子どもの成長と絵本』の中の「歌がきこえてくる」の項で、『ぐりとぐら』『おだんごぱん』『だいくとおにろく』『おんちょろちょろ』『こぶじいさま』『ぼくの音楽・ぼくの宇宙』『あおい目のこねこ』の絵本を取り上げている。また「身の回りにあるいろいろな音（１）（２）」の項で『ばけものづかい』『クマのプーさん』『おおきなおおきなおいも』『あまがさ』『たたく』を取り上げている［13］。

以上のように、「絵本から音楽が響いてくる」感覚は、筆者の新しい発想ではなく、何人かの絵本論者が自分が読んだ絵本から強く感じていたことである。音楽を感じることについての絵本論の中の紹介では、彼らの出会った本について何冊かの代表的な、あるいは典型的なものについて書いており、多くの絵本についての概略を見たものはない。筆者はそれを、2つの図書館が所蔵する絵本から、音が聞こえてくる絵本も含めて、音または音楽を取り上げている絵本を読み、そこに表現されている音楽についての概略と、音が絵本から聞こえてくる理由を考えようとするものである。

Ⅱ　方法

目　　的

絵本の中で音や音楽はどのように描かれているかを見、何故絵本から音が聞こえてくるのかを考える。

研究期間

絵本の選出は2008年４月より2010年２月まで。

研究対象

この研究に使用した絵本は合計240冊である。これらは愛知東邦大学附属図書館（絵本約2000余冊）と近江八幡市立図書館（絵本は児童図書１万余冊の中に含まれているが児童図書と絵本との区分けは不明）の２つの図書館が所蔵する絵本の中からテーマに関係するものを選んだ。

研究方法

①データの収集：絵本一冊につき１枚の絵本リストを製作する。絵本リストは絵本の名前・作者・出版社・出版年・内容・描かれている音楽の場面・意味・描かれた絵と頁、を記入したもの240枚を作成する。

②読み取り指標の決定：音・音楽が、絵本の中で何を伝えようとしているのかを読み取り、カテゴリ分析を行った。読み取りのカテゴリについては３度の読み取りを行い、56個の指標を確定した。

③カテゴリ分析：56個の指標をもとに、240枚の絵本リストを筆者がカテゴリ分析し、３回の読み取りを行った。読み取りの客観性を考え、古市の「アンケート調査のデータ読み取り作業における信頼度と問題点についての研究[14]」により、筆者の複数回の読み取りとした。精度を高めるために、３回で一致しなかったものについて、さらに３回の読み取りを行った。結果405個のカテゴリを抽出し、それらは56個の小項目、そのどこにも入らないものの「その他」を加えて、57項目に分類できた。それをさらに大項目として７個にまとめた。

Ⅲ　絵本は音楽をどのように表現しているか（結果）

１．絵本が語る音楽の姿

（1）音楽の描かれ方の概略（大項目）

図１は240冊から抽出された405個のカテゴリの中で７つの大項目がそれぞれ占める割合をグラフにしたものである。最も多いのは「音楽が人生の役に立つ」ことで全ての項目の38％を占める。ここに入るカテゴリは音楽を聞いて「人を動かす・躍らせる」「みんなをひとつにする」「楽しみに行う」「大きな音・声で知らせる」など、音楽があることで人生の何らかの役に立つもので18小項目（以下項目という）が入る。次いで、「音楽の種類」

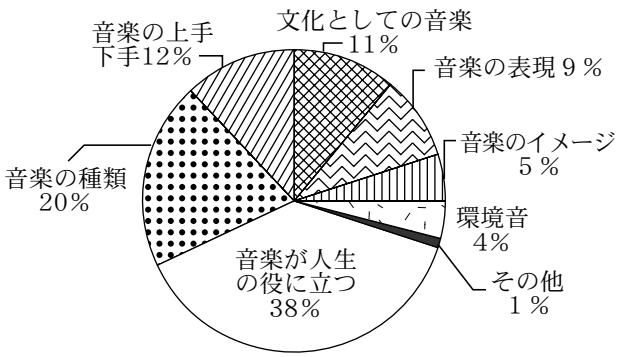


図１　絵本が語る音楽

で20％、「楽器」「オーケストラなど演奏会」「練習風景」「パレード」の他に、「動物たちの演奏」や「おばけの歌」などの８項目が含まれる。３番目に多いのは「音楽の上手下手」がストーリーに関わってくるもの５項目で、「はじめは下手だったが上手になる」音楽が「嫌い・うるさい」などが含まれる12％である。次の「文化としての音楽」は11％で、「行事や特別の日の音楽」「懐かしい音楽」「民族の音楽」「音楽に人の面影」「文化の価値が音楽でわかる」など７項目である。「音楽の表現」は９％で、「音楽に心惹かれる」「特別な表現」「心が音楽に反映」「見る・聞くことで自分も真似る」「自由を謳歌する」「好きな音で満たされる」「雰囲気に合った曲を作る」「音楽に合わせた動き」の８項目がこれに入る。「音楽のイメージ」は「言葉と音のイメージ」「ものと音楽のイメージ」「色彩と音楽」「人と音楽のイメージ」「形と音楽のイメージ」の５項目で５％にあたる。「環境音」は４％で、「自然から聞こえる音」「生活の中から聞こえる音」「地球上で初めて聞く音」「バックグランドミュージック」がこれに含まれる。「その他」は想像で楽器を考えるもの、音の聞こえ方など、ＡからＧの大項目に分類できないものである。

表１はその具体的な例数を示している。

表１　絵本に描かれている音楽

大項目	小　項　目	例数
Ａ音楽が人生の役に立つ150例	1　人を動かす・躍らせる	**27**
	2　みんなをひとつにする	**15**
	3　楽しみに行う	**13**
	4　大きな音・声で知らせる	**11**
	5　わらべ歌・あそび歌	**10**
	6　仕事と音楽をくっつける	**9**
	7　子守唄	**9**
	8　自分を表現する	**9**
	9　仲間になる	**8**
	10　音楽を仕事とする	**8**
	11　音楽に癒される・楽しくなる	**7**
	12　社会に役立つ	**5**
	13　人生を左右する	**4**
	14　教えたいこと	**4**
	15　教養として習う	**4**
	16　幸運を連れてくる	**3**
	17　音・音楽でその存在がわかる	**3**
	18　記憶をするための歌	**1**
Ｂ音楽の種類82例	19　楽器	**32**
	20　動物などが演奏する	**12**
	21　オーケストラなど演奏会	**12**
	22　練習風景	**10**
	23　特色のある歌	**5**
	24　パレード	**5**
	25　おばけの歌	**4**
	26　オペラ	**2**
Ｃ音楽の上手下手48例	27　はじめは下手だったが上手になる	**17**
	28　嫌い・うるさい	**12**
	29　名演奏家である	**10**
	30　得意芸を披露する	**6**
	31　演奏が下手	**3**
Ｄ文化としての音楽43例	32　行事や特別の日の音楽	**19**
	33　懐かしい音楽	**11**
	34　民族の音楽	**4**
	35　音楽に人の面影	**4**
	36　文化の価値が音楽でわかる	**2**
	37　ホール・美術館など	**2**
	38　歴史を歌った絵本	**1**
Ｅ音楽の表現35例	39　音楽に心惹かれる	**10**
	40　特別な表現	**9**
	41　心が音楽に反映	**6**
	42　見る・聞くことで自分も真似る	**3**
	43　自由を謳歌する	**3**
	44　好きな音で満たされる	**2**
	45　雰囲気に合った曲を作る	**1**
	46　音楽に合わせた動き	**1**
Ｆ音楽のイメージ23例	47　言葉と音のイメージ	**8**
	48　ものと音楽のイメージ	**7**
	49　色彩と音楽	**4**
	50　人と音楽のイメージ	**3**
	51　形と音楽のイメージ	**1**
Ｇ環境音18例	52　自然から聞こえる音	**8**
	53　バックグランドミュージック	**4**
	54　生活の中から聞こえる音	**3**
	55　地球上で初めて聞く音	**3**
Ｈその他6例	56　その他（想像の音楽・音の聞こえ方等）	**6**
７の大項目　56の小項目　**405のカテゴリ**		

(2) 絵本の中で多く見られた音楽の場面（小項目）

次に全ての小項目の例数の多い順に並べたもの上位10位が表２である。最も多いのが、「楽器」であり、32例ある。２番目が音楽で「人を動かす・躍らせる」で27例、３番目が「行事や特別の日の音楽」19例で、４番目は演奏するのが「はじめは下手だったが上手になる」が17例、５番目は音楽があることで「みんなをひとつにする」の小項目15例である。音楽が好きで「楽しみに行う」が13例で６位と続く。７位は「動物などが演奏する」「オーケストラなど演奏会」「嫌い・うるさい」で、10位は「大きな音・声で知らせる」「懐かしい音楽」である。

表２　小項目多い順

順位	小項目	例数
1	楽器	**32**
2	人を動かす・躍らせる	**27**
3	行事や特別の日の音楽	**19**
4	はじめは下手だったが上手になる	**17**
5	みんなをひとつにする	**15**
6	楽しみに行う	**13**
7	動物などが演奏する	**12**
	オーケストラなど演奏会	**12**
	嫌い・うるさい	**12**
10	大きな音・声で知らせる	**11**
	懐かしい音楽	**11**

(3) 音楽の描かれ方の違い（国別・年代別）

大項目について、外国と日本の差、1900年代に出版されたものと2000年代に出版されたものの差をレーダーチャートで比べてみたものが図２～５である。外国と日本についても、1900年代と2000年代についても、ほとんどレーダーチャートの差は見られない。

また、小項目の多い順に並べたものが表３と表４である。ここでは上位10位までを示しているが、その１位・２位は「人を動かす・躍らせる」「楽器」で、１位と２位の順位は違っても、２位まではこの２つが占めている。このことから、国別と時代差についてはほとんど差がないということで、今回はその差を考えないこととする。

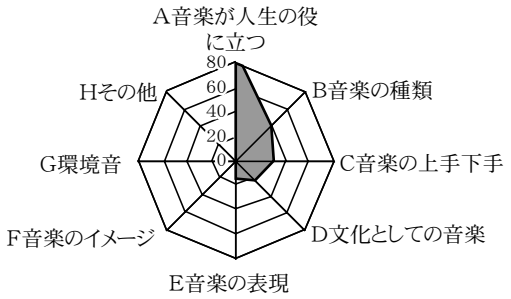


図2　外国の絵本にみる音楽

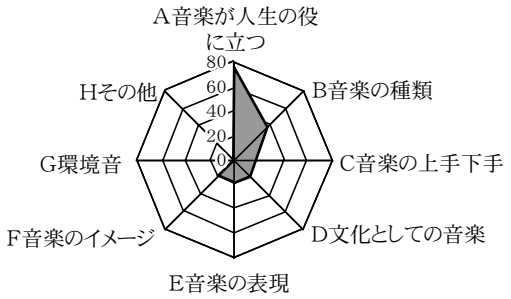


図3　日本の絵本にみる音楽

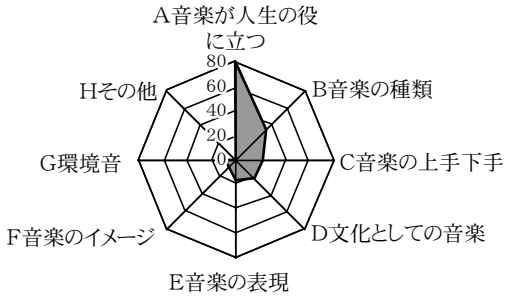


図4　1900年代の絵本にみる音楽

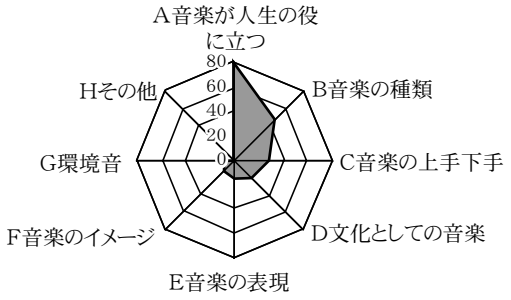


図5　2000年代の絵本にみる音楽

表３　音楽の描かれ方の外国と日本の違い

外国の絵本			日本の絵本		
順位	カテゴリ	件数	順位	カテゴリ	件数
1	人を動かす・躍らせる	15	1	楽器	17
	楽器	15	2	人を動かす・躍らせる	12
3	行事や特別の日の音楽	13	3	みんなをひとつにする	10
4	大きな音・声で知らせる	10	4	はじめは下手だったが上手になる	8
5	はじめは下手だったが上手になる	9	5	ものと音楽のイメージ	7
				言葉と音のイメージ	7

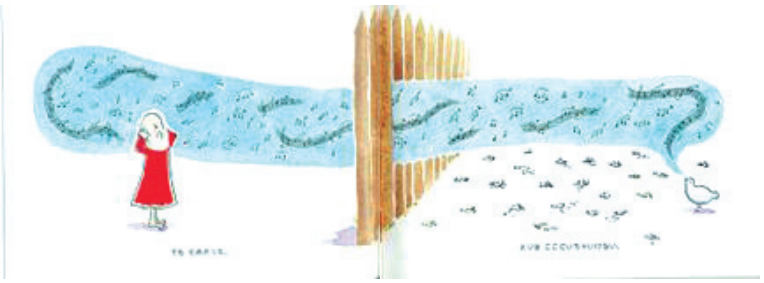
表４　音楽の描かれ方の1900年代と2000年代の違い

1900年代の絵本			2000年代の絵本		
順位	カテゴリ	件数	順位	カテゴリ	件数
1	人を動かす・躍らせる	17	1	楽器	15
	楽器	17	2	人を動かす・躍らせる	10
3	はじめは下手だったが上手になる	11	3	楽しみに行う	10
4	オーケストラなど演奏会	10	4	行事や特別の日の音楽	8
5	行事や特別の日の音楽	11	5	みんなをひとつにする	7
	言葉と音のイメージ	7			

２．音楽の描かれ方の具体例

①音を空間に描く

実際、音楽はどのように描かれているのだろうか。絵本の例をあげながらみていく。音を形にして描かれたものの例として『楽園』がある。誰もいない、なにもない島で一人暮らしていた男のもとに、一羽の鳥が飛んできた。以来彼の生活は乱されてしまう。島をきっちり二つに分け塀を建てた[絵図1－1]が、小鳥の歌は聞こえてくる。鳥を鳥かごに入れてすっぽり覆いを被せ平和が戻るが、さびしくなって鳥をかごから出したが鳥はどこかに飛んでいってしまった。さびしくなってしまった男のもとに戻った小鳥を見て歌って踊って喜ぶ男と小鳥の合唱が起こる［絵図１－２］。音は描けないが、空間の大きさと形と色彩などで、これを空間的に表すことができた例である。



［絵図１－１］小鳥の声がうるさいと思う男



［絵図１－２］一緒を喜び歌う男

［絵図１］音を空間に描く『楽園』



［絵図２］聞いた者の心が優しくなる
『もぐらヴァイオリン』

② 音楽の演奏とそれを聞いている人を並存

多くの絵本では音楽を奏でるものとそれを聞くものを同時に描くことで、音楽を聞く人々の心を描いている。これはテキストを読むまでもなく、視覚で直接に感じることのできる音で示した人の心である。『もぐらのヴァイオリン』は、地面の下で穴を掘っていたもぐらがテレビでヴァイオリンを聞いた。その美しい音色に魅かれてヴァイオリンを手に入れ、一生懸命練習した。はじめはひどい音であったが、昼間はトンネル堀りをしながらも夜は練習で、テレビの人よりうまくなっていった。もぐらはみんなのために演奏する。それを聞いた地上の兵士は戦争がばからしくなり、仲良くなる［絵図２］。もぐらは自分の音楽が人の心を穏やかにして平和にするかもしれないことを信じる。



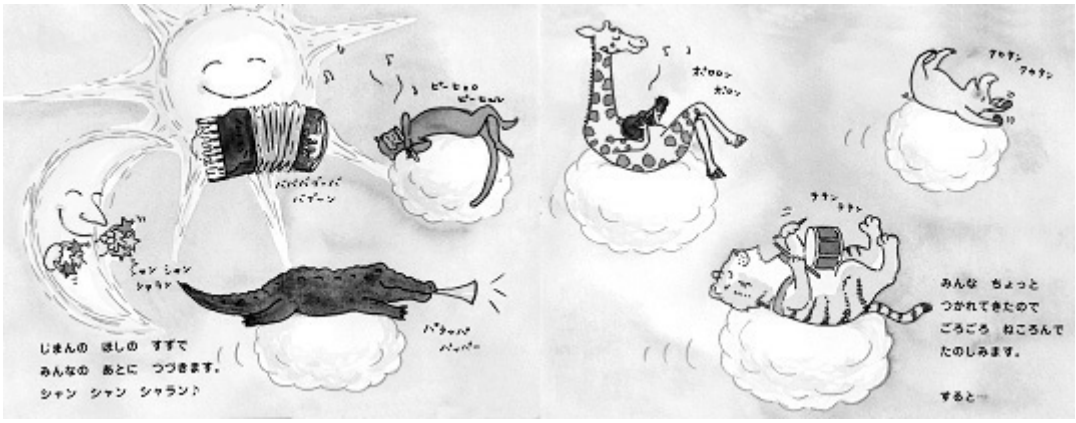
［絵図３］印度の虎刈りを弾き猫が逃げ回る
『セロ弾きのゴーシュ』

③　練習風景

練習して音楽がだんだん上手になっていくプロセスを描いた絵本は多い。セロ弾きのゴーシュはセロが上手く弾けず、楽長に叱られてばかり。その晩、自宅の水車小屋に帰ったゴーシュが練習していると猫がやってきてトロイメライを弾いてほしいという。ゴーシュは嵐のような勢いで「印度の虎刈り」という曲を弾き、猫は逃げ回る。次の晩はカッコウがやってきて、同じカッコウの声でも鳥によって鳴き方が違うと教わる。次の晩やってきたタヌキには二番目の糸を引くときに遅れること、次の晩にやってきたネズミにはゴーシュのセロが動物たちの病気を治していたことを教えてもらう。６日目の晩に行われた演奏会で金星音楽団は見事にアンコールを受ける。絵図３は猫と練習するゴーシュであるが、ゴーシュとネコの身体のうねりと動きの軌跡により、練習の激しさが伝わってくる。

④ 音楽の軽やかな感じを表現

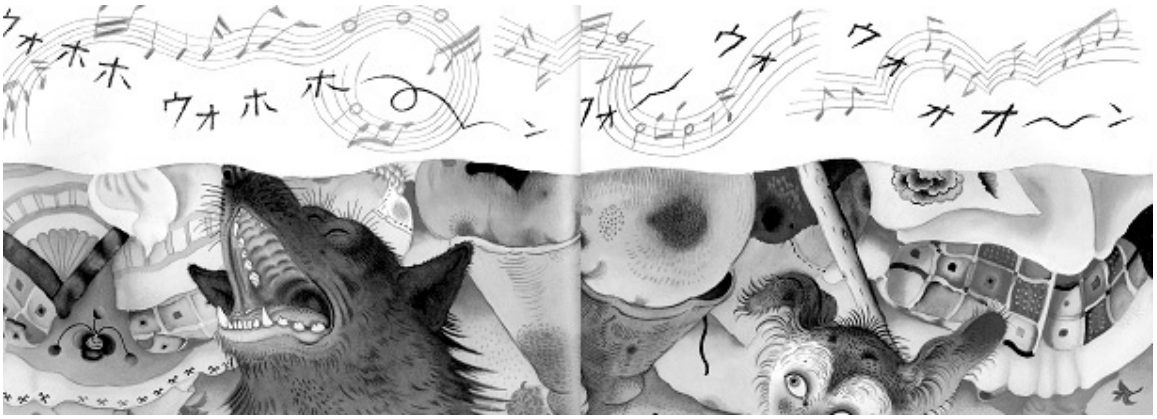
一人の音楽がみんなをさそい、楽しくて空へ舞い上がる話である。ぶーたはごきげんでカスタネットを鳴らし、森を跳ね回る。それを見ていたトラさんもテテンテテン、りすさんはポロロンロロン、さるさんもピーヒョロピーヒュル、ワニさんもパラッパパッパー、とあんまり楽しくてみんなの身体がふわりと浮かぶ。お日様もお星様もみんなで続く［絵図４］。音楽の楽しさと軽やかさを絵にしたものである。古市は「楽しさと空に舞い上がることのマッチングについて、学生たちに作らせたお話が、ハッピーエンドのときは全て空に舞い上がるものであった［15］」ことを報告している。



［絵図 4］音楽で楽しくなった空へ舞い上がる『ごきげんぶーた』

⑤ 音符でメロディの感じを出す

歌ってはいけないときに、気分が高揚して思わず歌ってしまう話がある。『セルコ』の話はセルコが年を取りすぎて、お百姓さんからお払い箱にされてしまいそうになる。それを見ていたオオカミが助けに入り、犬のセルコは大事にされる。お百姓さんの娘が結婚することになりそのパーティーで、飲めや歌えやの大騒ぎに乗じて、犬はご馳走を掠め取ってお礼にオオカミに運ぶ。楽しくて歌いたくなったオオカミは、テーブルの下に隠れているのも忘れて、もう我慢ができなくて大きな声で歌ってしまう。この絵本は歌っている部分に楽譜を書き、メロディのイメージを強固にしている。これから子どもたちが目にするであろう楽譜を踊らせた音楽の知識と感性の合成である。楽譜を載せている絵本は他にも見られる。ひとつは『セルコ』のように場面の音をメロディで書くもので、もう一つは『わらべ歌』のように、音楽の歌について楽譜で書かれたものである。

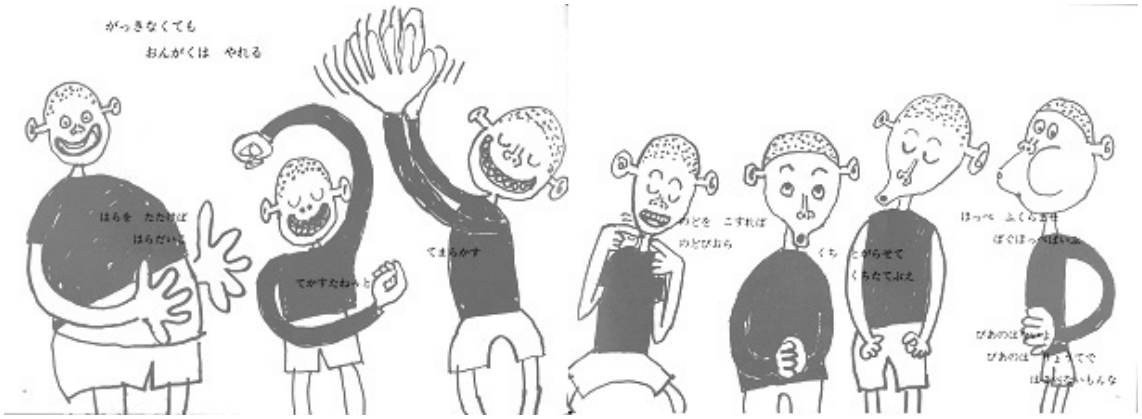


［絵図 5］楽しくて我慢できなくなり歌いだすオオカミ『セルコ』

⑥ 身体の楽器

実際に楽器を演奏するのではなく、身体で楽器を表現し音を感じさせるものがある。『ハハハの楽隊』は、楽器はなくても音楽が演奏できる泥棒の話である。腹をたたけば腹太鼓、手カスタネット、手マラカス、喉をこすれば喉ビオラ、口を尖らせて口縦笛、ほっぺパイプ。ハハハの仕事は簡単で、赤ん坊が生まれたら音楽、人が死んだら音楽を奏でることである。彼らがいなくなってからの半年経ってわかったことは、でっかい真珠のアラフラの女王が盗まれた。この話はボディを楽器に見立てて音楽を奏でるという、思い

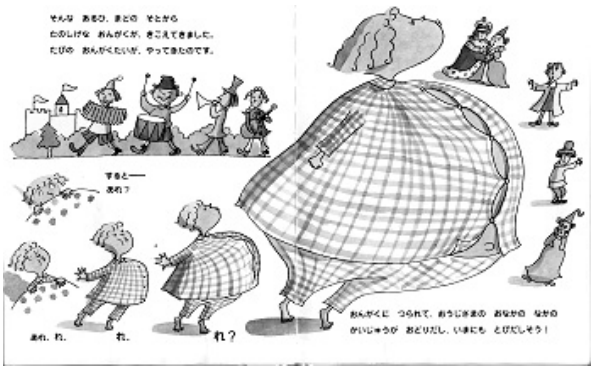
もかけない愉快なものである。これは、そのまま、存在しないものをあると仮定するような、身体表現で行っている手法である。



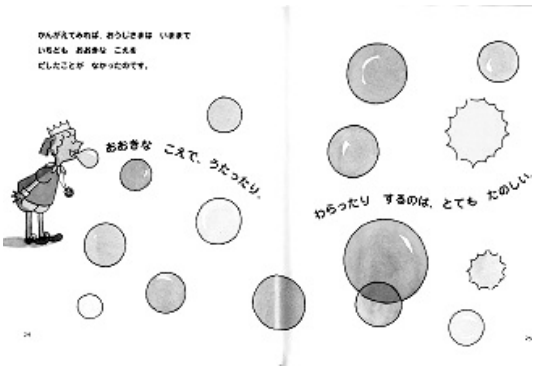
［絵図 6］ボディを楽器と考えて叩く『アハハの楽隊』

⑦ 音が口から飛び出してくる

「物言わぬは腹膨るる思い」というが、音を我慢しておなかにたまり、王子さまのおなかがどんどん膨らんでいく『おうじさまのいちだいじ』がある。王子様は色々な勉強をしなければならない。ぺらぺらしゃべらず、大笑いもいけない、背筋をぴんと伸ばした立派な王になるつもりである。ところが、近頃おなかがもぞもぞ動き、何がいるのか世界中の医者が見立てたがわからない。そんなある日、窓の外から音楽隊の楽しそうな音楽が聞こえてきた。音楽につられておなかの中の怪獣が踊りだした。そして、口からとびだしたのは、大きな声の塊であった。大きな声で歌ったり笑ったりするのはとても楽しくて、声をだしているとおなかが引っ込んでくる。歌いたい気持ちを我慢することと、声を吐き出すことを描いており、「あー、あっ」と声まで聞こえてくる。



［絵図 7－1］おなかに溜まった音



［絵図 7－2］声を出すと飛び出す音楽

［絵図 7］音を具体的に描いた『おうじさまのいちだいじ』

⑧ 雰囲気に合わせる音楽

環境に合わせて違う音楽が聞こえてくる絵本である。『オオカミくんはピアニスト』ではオオカミくんが呼ばれて出かけたところで、ピアノを弾く。演奏する音楽は環境に溶け込んで特色のある音色で聞こえてくる。静かで孤独なオオカミくんの芸術家らしい雰囲気は、出かけていくまでがあまりにも静寂感が漂っていて、読者の心の中で音を欲しているときに、図を手がかりに、気持ちがぱっと明るくなり、踊りの様

子が目に飛び込むと同時に、音楽が聞こえてくる。

海のかもめが舞う頁では、最初から明るい軽い円舞曲が聞こえるし、貝殻を耳に当てたときのザーザーという音がする［絵図８－１］。森ではリスたちが待っていた。森の音に合わせてピアノを弾くと大喜びである。ひつじたちが待っているところでは、風の音に合わせてピアノをひくと、羊たちは大喜びで踊りだす［絵図８－２］。バックの風景とそこにいる動物たちのようすが曲を作って響いてくる。





［絵図 ８－１］浜辺で演奏する　　［絵図 ８－２］羊に囲まれて演奏する

［絵図 ８］雰囲気に合わせて演奏する『オオカミくんはピアニスト』

２．イメージを音で表す

「僕にはひみつがあるんだ」からはじまり、それぞれの人から連想される楽器をあてはめて考えている。『ひみつの楽器』の絵はおなかが大きい男の人は太鼓を隠しているし［絵図９－１］、口の大きな男の子はハーモニカ、細長い身体をもった男はアコーディオン、太った女の人のロングスカートの下にはピアノ［絵図９－２］、長い手の男の人が曲げた腕にはトライアングル、双子の女の子がハープ［絵図９－３］など、人と楽器のイメージが結びついている。







［絵図 ９－１］　　［絵図 ９－２］　　［絵図 ９－３］

［絵図 ９］大きいおなかのイメージを太鼓で表すなど『ひみつの楽器』

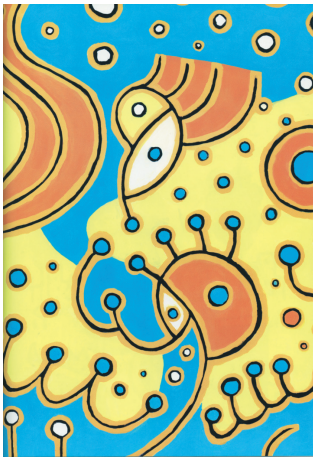
『トンカチぼうや』はトンカチで叩いて、いろんな音をたっぷりと見る。釘を打つ音・ガードレールの音・水の音の絵を示してある。が、他に湿った土の音・木の幹の音の絵がある。これらは作者の感性で描かれたものであるが、非常に愉快で、音にも絵柄があるのではと想像をはせることのできる試みである。



［絵図 10ー１］釘を打つ

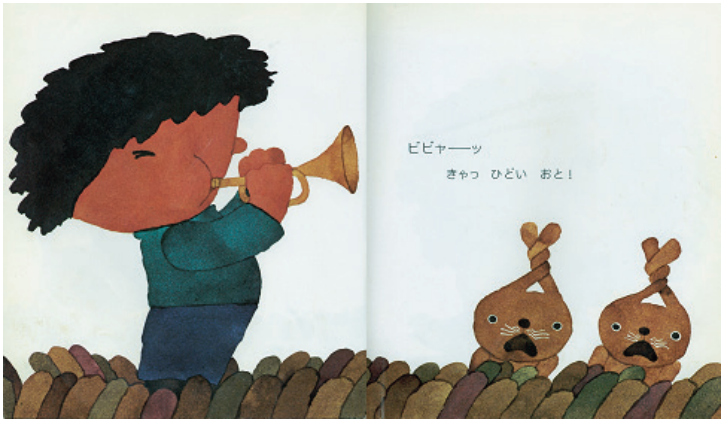


［絵図 10ー２］ガードレールの音



［絵図 10ー３］水を叩く音

［絵図 10］トンカチで叩いたときに見える音の絵『トンカチぼうや』



［絵図 11］嫌な音を聞いて困ったウサギ『ラッパをならせ』

３． やかましい音・嫌な音

嫌な音を聞いたときの様子がわかりやすい絵で描かれている。病気だった男の子はラッパを持って外へ遊びにいく。出会ったウサギにラッパを吹いてあげるが、ビビーッとひどい音。絵図11は兎がラッパの音を聞き耳を絡ませてそう思っている様子がよくわかる。誰もいないところでふいてみても、木から落ちる小鳥や蛇。象さんも縮こまるくらい。ラッパは僕の風邪がうつったんだとお医者さんに見せて、ぐっすり眠らせると、ぴかぴかになっていい音が出るようになる。聞いたものの反応が音の質を伝えている。

Ⅳ　絵本の中の音楽のイメージ

１．普遍的な音楽のもつ力

（1）音楽が人生の役に立つ

音楽は楽しいが、音楽がわれわれにもたらす効用は表５に小項目の内容を示しているように、他にも多くある。本論文においてはそういった音楽の普遍的な力を示すものが最も多く18小項目（全カテゴリ中38％）抽出できた。その中で最も多いのが「人を動かす・躍らせる」で27カテゴリ（音楽が人生の役に立つ中の18％）ある。その次にくる「みんなをひとつにする」「大きな音・声で知らせる」「わらべ歌・あそび歌」「子守唄」「仲間になる」「音楽に癒される・楽しくなる」も人を動かせることに近いと考えると、この大項目の半分以上を占めることになる。後の小項目は「自分の役に立てる」ことに使われている。

音・音楽が身体表現に与える影響は大きい。このことを利用してダルクローズはユーリトミックというリズム感の教育方法を考案した。ダルクローズが利用したのは音楽の持つ動きへの即興的な影響力で、身

体で感知して訓練しなければリズム感は良くならないとした。そして、音楽におけるリズム感の養成はこのリズム教育に支えられ発展し、世界中に広まり、今なお動きのエチュードの主流となっている。それはリズム感の育成のみならず、人間教育にまで及んでいる［16］。

ダルクローズを待つまでもなく、日本には昔からリズム性を大事にするところがあり、音・音楽のもつリズム性を利用して記憶を確かにする場面に多く使われてきた。また、わらべ歌・あそび歌にもそのことが顕著に見られ数多く存在する。子どもの生活に欠かせないツールであり、絵本にもそのことが取り上げられている。

表５　人生に役立つ音楽の役割

中項目（例数）	小項目（例数）
人を動かせる（87）	人を動かす・躍らせる（27）・みんなをひとつにする（15）・大きな音・声で知らせる（11）・わらべ歌・あそび歌（10）・子守唄（９）・仲間になる（８）・音楽に癒される・楽しくなる（７）
自分の役に立てる（63）	楽しみに行う（13）・仕事と音楽をくっつける（９）・自分を表現する（９）・音楽を仕事とする（８）・社会に役立つ（５）・人生を左右する（４）・教えたいこと（４）・教養として習う（４）・幸運を連れてくる（３）・音・音楽でその存在がわかる（３）・記憶をするための歌（１）

（2）音楽の上手下手がもたらすこと

大項目の２番目に多いのは「音楽の種類」（82例で全カテゴリ中20％）で、音楽の持つ文化の一面を知らせる教育的な意味も含み、子どもたちに親しみ易くするためか、動物を主人公にしたものも多い。３番目に多いのが「音楽の上手下手」（48例で全カテゴリ中12％）である。音楽は集団で大きな力を発揮するが、個人にも大きな影響を与える。特に、才能があることは一生を左右する問題であるが、絵本でもそのことを扱っているのである。音楽が「はじめは下手だったが上手になる」ことや「名演奏家である」「得意芸を披露する」の良い面からのものが全「音楽の上手・下手」のうちの33例（69％）、音楽が「嫌い・うるさい」「演奏が下手」の良くない面からが15例（31％）である。音楽が人に与える瞬間的な影響が大きいことは前項で述べたが、それ故に、個人の好みに関わらずいやおうなしに耳に入ってくる。したがってそれに対して嫌いとかうるさいという気持ちが書かれているのはうなずける。

（3）文化・環境としての音楽

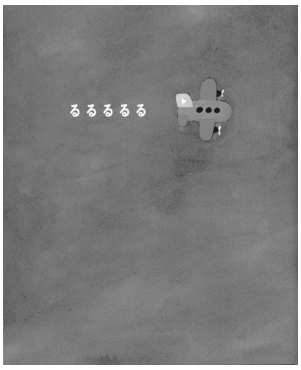
文化としての音楽には、生活の一部分として、「行事や特別の日の音楽」「民族の音楽」があり、次の世代にストーリーとして伝えていくものが多くあることはうなずける。音楽によって伝わっていくものとして「懐かしい音楽」「音楽に人の影」「文化の価値が音楽でわかる」「ホール・美術館」がある。音楽は日常の生活から自然と入ってくるが、絵本からの情報は他国の文化や音楽の価値をより強固にしてくれる。『せかいでいちばんつよいくに』の絵本には、良い歌は自然に広がり、文化で国を征服した話が描かれている。ある大きな国の大統領は世界中の人々を幸せにするために世界中を征服していき、まだ、征服されていない国はたったひとつになった。あんまり小さな国なので放っておいたが、その国にいくと、兵隊は居なくて、市民に歓迎を受ける。兵隊たちは小さな国の人たちの文化を共に楽しみ、歌を習った。凱旋歌と共に国へ帰っていくが、気がつくと大きな国では小さな国の文化があふれ、隊長も自分の息子が眠るときにせがまれて歌った歌は全て小さな国ものだった［17］。このように文化が力に勝った話は快い。

また、音楽を通して人を懐かしむ『かわいいことりさん』がある。これは、口笛を吹くのが上手なおばあちゃんが亡くなり、孫が口笛を吹く姿にその面影をみる話である［18］。

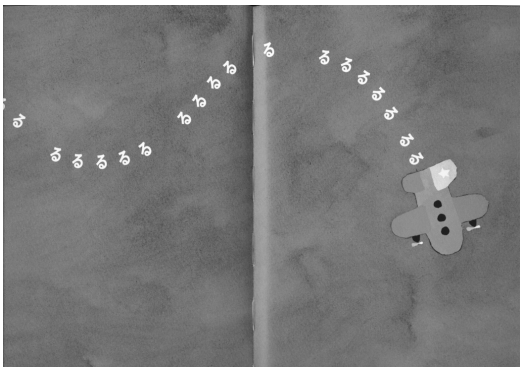
2．イメージを音で表す

イメージを音で表したものはことば・もの・色彩・人・形と音楽を結びつけたものである。絵図12は五味太郎の『るるるるる』の一場面であるが、次のような表紙裏の記述がある。「これは音の絵本です。文字の絵本です。そして、やがてゆったりと言葉が聞こえてくる絵本です［19］」。

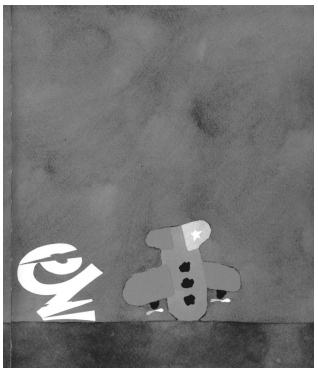
テキストのほとんどが「る」の言葉で書かれていて、飛行機が飛び回る様子が目に浮かぶ。最初は小さな「る」の文字だけ、次に小さな飛行機が見え［絵図12－１］、るるるるとエンジン音を響かせ、だんだん近くに姿を見せる［絵図12－2］。エンジンの音が大きく書かれ、最後に「る」と地面に落ちた時［絵図12－３］には「がつん」という音すら聞こえてくる。その他に『りりりりり』『びびびびび』『ぽぽぽぽぽ』など言葉と音のイメージをたくみに表した絵本がある。



［絵図 12ー１］



［絵図 12ー２］



［絵図 12ー３］

［絵図 12］飛行機のエンジン音が聞こえる『るるるるる』

3．やかましい音・嫌な音

『世界で一番やかましいおと』の世界で一番やかましい国の、世界で一番やかましい音を好む王子様の誕生プレゼントに、民衆は口パクの一瞬の静寂を送る。そのときに、自然のきれいな音を聞いた王子様は静けさの良さに目覚める。現在のやかましい音環境を象徴するような話であるが、「確かに曲を作ったり、すぐにメロディーを覚えたりと音に対する敏感さや聞き分ける力は持っているのですが、静寂を知らないということは音に対して鈍感なめんもあるんじゃないだろうかと心配になってきました。子どもたちに、たまには鳴りっ放しのラジオを止めてごらん［20］」と注意を促す絵本でもある。

Ⅴ　絵本から聞こえる音楽

〈テキストのリズムやせりふがメロディーを生む〉

「文中に歌や、心地よい音楽の繰り返しのある絵本を子どもといっしょに読むのは、普通のお話しとは違う楽しみがあっていいものです[21]」と中村はその著『子どもの成長と絵本』のなかで、『ぐりとぐら』をあげ、「ぼくらのなまえはぐりとぐら　このよでいちばんすきなのは　おりょうりすることたべること、ぐりぐらぐりぐら」の部分で調子のよいメロディが自然と口をついてでる［22］という。筆者も以前に『ぐりとぐら』のミュージカルを作った際に作曲したことがあるが、子どもたちの口から出たせりふの抑揚をメロディー化したもので、その部分を図６に示す。

筆者他は「身体表現とその伴奏音楽の関係についての新しいアプローチ」の中で視覚的な動線の類似性を指摘した[24]。さらに、筆者は動きのイメージと楽譜の軌跡の一致を利用する伴奏の仕方を『身体表現』

の中で解説している[25]。例えば図７のように、傘を開いたり閉じたりする場面、傘を揺らす場面においてはその形を音符の上に描き、そこに音符を置いていくと、動きにぴったりの伴奏音楽を作曲することができる。また、形のないものは視覚的なイメージを楽譜の上に再現する。曲の後半の揺れる部分がそれに当たる。



図６　ぐりとぐらの楽譜［23］

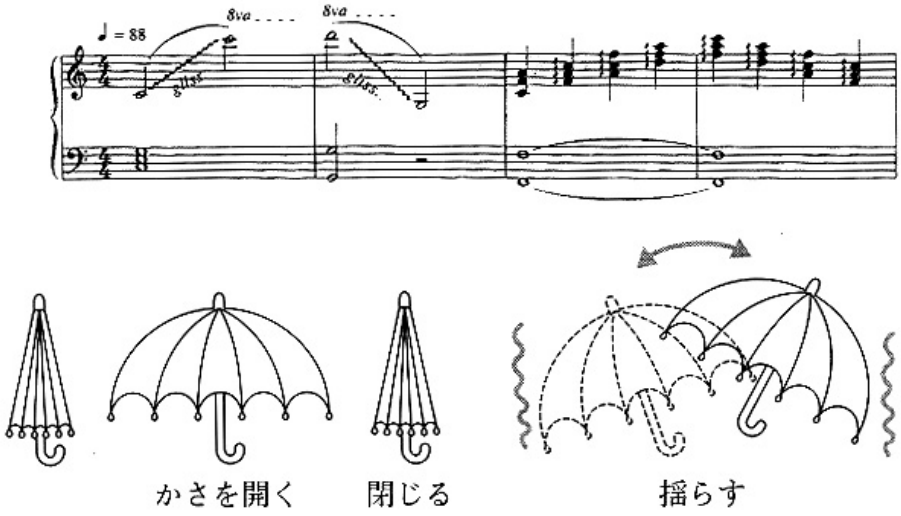


図７　身体表現のための曲［26］

〈共感のしわざ〉

『るるるるる』のようにオノマトペは、動きを言葉にしたものであるが、すぐに物の動きを連想させ、それに伴って実際に聞こえる音をフィードバックさせる。したがって、五味太郎の言葉の一連の本は、音をこだまさせる絵本といえる。子どもたちは同じ文字の羅列でも、そこに、事物のもつ意味をこめて、身体表現するところまで付き合っていく。

「色彩と音楽」は『うたがみえるきこえるよ』において、「みなさん！わたしにはうたがみえます。音楽がえがけます。色もきこえます。わたしは空のにじにふれ、大地のいずみをかんじます。わたしの音楽はひと

りでにかたりだし、色はおどりはじめます。さあ！あなたも耳をすませ、空想のつばさをひろげて、絵本のなかのうたをみてごらんなさい［27］」の１ページのみに示される文章に顕著である。モノトーンのヴァイオリンニストがやってきて、ヴァイオリンを奏ではじめる。音がはじけているような感じで、ドンドン色彩を帯びた音のイメージ図が展開する。最後には同じ格好のヴァイオリニストが同じ格好で演奏しているが、音楽が豊かに響いてカラーの絵がぴったりになる。



［絵図 13］色彩の豊かさで音楽のイメージを描く『うたがみえるきこえるよ』

色がついていくことで、調子の良し悪しが見えるのは『ちいさいきかんしゃレッドごう』にもみられる。「色と色のもつ抽象性は子どもにまっすぐ語りかける。・・・色によって子どもたちは絵本の中とおなじように、目に見える世界のすばらしい感覚的な楽しみの中へ導かれていく［28］」とマーシャ・ブラウンもいうように、色によって子どもたちの音楽が華やかに鳴り響くのである。

〈オノマトペによるリズム性が音楽を奏でる〉

「宮澤賢治を読んでいると、ずぅーっと音楽が鳴り響いている［29］」と不思議に思っていることを、福音館書店の斉藤は『だから子どもの本が好き』の中で述べている。如月は『童話学がわかる』の中の「五感で感じる賢治の世界」の項で「賢治の世界は五感を刺激する。・・・・詩人でもあった賢治のことだから、言葉の音的側面の持つ効果に対してはことのほか敏感であったろう［30］」と彼の自在さ力強さをもつオノマトペの魅力を讃えている。本論文で取り上げた彼の作品は『セロ弾きのゴーシュ』『どんぐりと山猫』『月夜のでんしんばしら』『雪わたり』であるが、宮沢賢治については『宮澤賢治の音楽』という本があり、そこに作曲された曲も掲載されているぐらい、音楽が聞こえてくる作家として知られている。『月夜のでんしんばしら』の「ドッテテ　ドッテテ　ドッテテド」というような特別なオノマトペから曲が湧き上がるのである。

「左脳が知覚するものは、直線的で、連続的で、因果関係をもち、集中的で、明示的で言語で表現されるもの―典型的な西洋風の「合理的」思考―である。これに対して右脳が知覚するものは、非直線的で、同時発生的で、因果関係がなく、散漫としていて、言語化されることがなく、空間的なものである。つまり、典型的ないわゆる原始社会の「非生産的な」思考である。［31］」というように、左脳と右脳が作用する、聴覚と視覚の共感の世界がひとつの刺激により展開される。これは幼児の教育面に言い換えると、次のようにも言い換えられる。

渋谷はその著『いまこそ子どもに読書の喜びを』の「美しい作品世界のイメージ体験」の項の中で「〈ストーリーの絵本〉の体験というのは、生き生きとした〈イメージ体験〉と結合させながら、幼児の身につ

けさせるということです。それは、こうも言いかえられます。つまり、ことば表現（言語形象）のもっているイメージを、視覚的（絵画）形象の助けを借り、それと融合させながら、あざやかに生き生きと描き出す能力を幼児の内面に育むことです［32］」と美しい作品世界のイメージ体験を説明している。音楽は耳から多く入ってくるものではあるが、それはあくまで子ども個人の周囲にあふれるいつもの、あるいは決まったものが多い。したがって、①音楽にまつわる豊かな情報は絵本からの視覚的な情報により、より生き生きと自分のものにすることができる。②視覚的な左脳の働きを、音を感じるという右脳の働きを引き起こし、より脳を活発に使用することができるのではないか。絵本を見た子どもが自分で自主的に自由に響かせるもの、それが絵本の音楽なのである。

〈空間を占める色と形と面積〉

『楽園』の絵はまさしく、音の状況を空間を占める色と形と面積で示している。壁を越えてきている青い塊は、耳を押さえる男の絵とともに迷惑な感じを示している。迷惑な音の響きは帯状に長く、離れているところがむしろ太くなっていて、迷惑さが迫ってくる。仲良くなったときには、男の声は紫色になり、オレンジ色の小鳥の声と絡み合って丸い形をなししかも二つが絡み合い、いかにも仲良くなった感じに描かれる。色彩に加えて、空間における図の面積、形、その絡み方などが音の質を伝える。

〈楽器や演奏する人の描写から想像できる〉

楽器のもつ音は、その楽器の音色をどこかで聞いていたり、形からおおよその想像がつく。それは記憶をたどるものであったり、形や大きさから推察するものであったり、ある楽器にまつわる話であると、その楽器の音が響く。また、演奏している人の並列的な描き方は音を聞いているものがどのような気分になっているかを伝える。『ラッパをならせ』のひどい音を聞いているウサギの耳のねじれ・象がくしゃくしゃに縮んでいる姿、木から落下する鳥、などの表情はそれをよく表している。すばらしい演奏の場面では多くの人々が集まって描かれていることや楽しげに踊る様子、平和になる姿などからそれがわかるが、よい演奏が聴衆を集めることは頭で既に学習されているからであろう。

〈読む人の心の中で奏でられる音楽〉

総じて絵本から音楽が聞こえてくるのは読んだものが自分の心の中で創っていく時間の流れに従う抑揚感である。田川は『こどもに贈る本』の中で、「音楽が読む人の心の中で飛翔する」の項で、音楽がいったん視覚化されると、その音楽はそこに固定される。しかし、本来そうならない、「見えない飛翔」こそが音楽の魅力なのだから［33］」と述べている。絵本の中の音楽は読む人が作るイメージの映像である限り、躍動感が消えることはない。

同じ本の中で、池田も『ベンのトランペット』を読みながら、最初から「トランペットの音を聞きながら頁をめくった。・・・・言葉と、豊かな想像力をかきたてずにはおかない視覚的表現とがいったいとなって獲得しているものである［34］」という。筆者も、同じ体験をしたのは、絵そのもののから受ける音の刺激と、お話そのものがトランペット奏者の生活から形作られていることなどが音を作ってしまって、頭の中で響いている経験をしている。

『昔話とこころの自立』の中で松居は「意識と無意識の狭間の中で一「大工と鬼六」の中で、「内なる子どもの声に耳をかたむけよ［35］」、と森の中から聞こえてくる声をわらべ唄・子守唄というキイワードを用いて、無意識からの声を描いている。子どもの場合はこういった無意識の流れ、言い換えれば、子どものもつ音楽性が大人とは違った音を響かせることが予想される。

「ブレイクの絵の舞踏的な詩法をうけとったのは、子どものために詩の本を作ることをはじめたクレーンやコールデコットではないでしょうか［36］」と堀内が『ぼくの絵本美術館』でいうように、絵本そのものに躍動感をこめて作られたものも多い。それももちろん音楽が聞こえる絵本ではあるが、見えない飛翔、つまり、人の心の中に創られた抑揚に加えて、絵本以外の生活で培われた音に対する情報を総動員するという作業が行われているのではないか。

おわりに

本研究は子どもの身体表現に大きな刺激となる音楽を、絵本からどのように得ているかということから出発したものであるが、人の持つ共感刺激として絵本は、子どもには音の響きを楽しむと同時に、想像力を利用して音を作ることで音が聞こえてくることがわかった。それであるならば、子どもの動線を長くして、いわゆる体験を豊かにすることで、想像力の基礎がしっかりしていることが大切であろう。また、人生に役にたつ存在としての音楽の姿も知ることができた。絵本から聞こえる音は、そのまま身体の動きとなって、身体による表現を引き起こすと同時に、音が聞こえたことによって、表現するさまざまな具体的なものを想像することで、身体表現がより豊かになるであろうことも予想された。

引用文献

［１］河合隼雄・松居直・柳田邦男著『絵本の力』岩波書店、2001年、p.5.
［２］前掲書［1］の p.15.
［３］レ・ベレストフ原案・阪田寛夫文・長新太絵『だくちるだくちる－はじめてのうた－』福音館書店、1993、p.24・27.
［４］片岡徳雄『いま、子どもと本を楽しもう　感性と心育ての読書法』北大路書房、2001年、pp.34－37.
［５］沢田としき作『アフリカの音』講談社、1996年. p.2・5・8・24.
［６］前掲書［1］のp.43.
［７］柳田邦男『大人が絵本に涙する時』平凡社、2006年、p.49.
［８］前掲書［7］のp.52.
［９］中島京子『ココ・マッカリーナのしみこむしみこむえほん』主婦の友、2006年、pp.26－29.
［10］ロバート・マンチ作・梅田俊作・乃木りか訳『ラヴ・ユー・フォーエバー』岩崎書店、1997年.
［11］前掲書［4］のpp.94－97.
［12］中川素子編・文教大学絵本と教育を考える会『絵本でひろがる楽しい授業』明治図書、2003年、p.39.
［13］中村征子『子どもの成長と絵本』大和書房、1983年、p.54－59.
［14］古市久子・遠藤晶・松山由美子・吉田清治「アンケート調査のデータ読み取り作業における信頼度と問題点についての研究」大阪教育大学紀要、第Ⅳ部門教育科学、第44巻、第1号、1995年、pp.27－40.
［15］古市久子『身体表現』北大路書房、1998年、p.35.
［16］エルザ・フィンドレイ著・小野進訳『ダルクローズリトミックによるリズムと動き』全音楽譜出版社、1973年、p.40.
［17］デビッド・マッキー作・なかがわちひろ訳『せかいでいちばんつよい国』光村教育図書、2005年.
［18］クリスチアン・アールセン作・石津ちひろ訳『かわいいことりさん』光村教育出版、2008年.
［19］五味太郎『るるるるる』偕成社、1991年、表紙裏.
［20］前掲書［13］pp.58－59.
［21］前掲書［13］のp.54.
［22］前掲書［13］のp.54.
［23］新リズム表現研究会・穴迫洋子編『身体表現あそび』幼年教育出版、1995年、p. 106.
［24］古市久子・玉井明「身体表現とその伴奏音楽の関係についての新しいアプローチー視覚的な動線の類似性―」大阪教育大学幼児教育学研究、15、1995年、pp. 1 －13.
［25］古市久子『身体表現』北大路書房、1998年、pp.175－177.
［26］古市久子『身体表現』北大路書房、1998年、p.175.
［27］エリック・カール作『うたがみえるきこえるよ』偕成社、1981年、表紙裏.
［28］マーシャ・ブラウン著・上條由美子訳『絵本を語る』ブック・グローブ社、1994年、pp.47－48 .
［29］工藤直子・斉藤惇夫・藤田のぼる・工藤左千夫・中澤千磨夫『だから子どもの本が好き』成文社、p.138.
［30］如月小春「五感で感じる賢治の世界」『童話学がわかる』朝日新聞社、1999年、pp.138－139.
［31］ヴィクター・ワトソン＆モラグ・スタルズ編・谷川誠剛訳『子どもはどのように絵本を読むのか』柏書房、2002年、p.329.

［32］渋谷清視『いまこそ子どもに読書の喜びを』岩崎書店、1988年、p.39.
［33］久保覚・生活クラブ生協連合会《本の花束》編『こどもに贈る本』みすず書房、2000、pp.86－88.
［34］前掲書［33］のpp.95－97.
［35］松居友『昔話とこころの自立』宝島社、1994、pp.28－34.
［36］堀内誠一『ぼくの絵本美術館』マガジンハウス、1998年、p.47.

絵図を引用した絵本

［絵図１］ニコラス・アラン作・いしいむつみ訳『楽園』ＢＬ出版、2000年、pp.14－17・p.24.
［絵図２］デイビッド・マクフェイル作絵・のなかともよ訳『もぐらのバイオリン』ポプラ社、2006年、pp.30－31.
［絵図３］宮沢賢治文・佐藤国男絵『セロ弾きのゴーシュ』ベネッセコーポレーション、1992年、p.11.
［絵図４］さとうめぐみ作絵『ごきげんぶーた』教育画劇、2007年、pp.17－18.
［絵図５］内田莉莎子文・ウクライナの昔話・ワレンチン・ゴルディチューク絵『セルコ』福音館書店、2001年、pp.30－31.
［絵図６］たかはしゆうじ文・やぎゅうげんいちろう絵『ハハハのがくたい』福音館書店、1985年、pp.12－13.
［絵図７］杉田比呂美『おうじさまのいちだいじ』講談社、1995年、pp.16－17.
［絵図８］石田真理『オオカミくんはピアニスト』新風社、2005年、pp.８－９・16－17・24－25.
［絵図９］五味太郎『ひみつのがっき』偕成社、1975年、p.15・18・20.
［絵図10］いとうひろし『トンカチぼうや』クレヨンハウス、1994年、p.４・12・20.
［絵図11］五味太郎『ラッパをならせ』佼成社、1991年、pp.６－７.
［絵図12］五味太郎『るるるるる』偕成社1991年、p.６・28・29・31.
［絵図13］エリック・カール作『うたがみえるきこえるよ』偕成社、1981年、p.５・28.

受理日　平成22年３月31日